

第3章

自助グループ運営・連絡会議

1. 目的

交通事故被害者等の自助グループの必要性や自助グループを取り巻く環境に対する理解を深めることによって被害者の回復のための自助グループ活動の促進や自助グループ設立の支援に資することを目的とする。

2. 概要

自助グループ活動の必要性や役割についての理解を深め、自助グループ活動を促進すること等を目的に、被害者支援センター、被害者団体及びナスバ（独立行政法人自動車事故対策機構）を対象として、交通事故被害者等団体による事例紹介をオンライン配信で開催した。

3. 開催日時等

開催日時：令和6年10月7日（月）13：30～15：50

対象者：被害者支援センター支援員等（各都道府県から1名程度）、被害者団体職員等、ナスバ

※オンライン配信にて開催（一般への配信なし）

テーマ：交通事故被害者等団体による自助グループ活動の紹介

4. 体制（敬称略）

（1）令和6年度交通事故被害者サポート事業検討会委員

- ・（公社）全国被害者支援ネットワーク理事 和氣 みち子
- ・武庫川女子大学心理・社会福祉学部社会福祉学科准教授 大岡 由佳
- ・警察庁交通局交通企画課交通安全企画官 牧 丈二

（2）事例紹介（2名）

- ・被害者支援自助グループ「ピア・神奈川」代表 渡邊 治重
- ・特定非営利活動法人いのちのミュージアム代表理事 鈴木 共子

（3）被害者支援センター、被害者団体及びナスバ

- ・47都道府県に所在する（公社）全国被害者支援ネットワーク所属の被害者支援センターの支援員等35名（27センター）、被害者団体代表者等5名（3団体）及びナスバ2名

（4）事務局

- ・警察庁 2名
- ・株式会社アステム 6名

5. プログラム

令和6年10月7日（月）

時 間	出演者	内 容
13：30～13：35	警察庁交通局交通企画課交通安全企画官 牧 丈二 事務局	主催者挨拶及び参加者の紹介
13：38～13：52	武庫川女子大学心理・社会福祉学部 社会福祉学科准教授 大岡 由佳 氏	講演「自助グループの意義とは」
13：52～14：23	被害者支援自助グループ「ピア・神奈川」代表 渡邊 治重 氏	事例紹介「「ピア・神奈川」の被害者支援」
14：23～14：40	NPO 法人いのちのミュージアム代表理事 鈴木 共子 氏	事例紹介「生命のメッセージ展これまでとこれから」
14：40～15：46	全員	質疑応答
15：46～15：55	交通事故被害者サポート事業 検討会委員 和氣 みち子 氏 大岡 由佳 氏	総括
15：55	事務局	閉会

6. 実施内容

(1) 講演「自助グループの意義とは」

交通事故被害者団体による自助グループ活動の事例紹介に先立ち、有識者の立場から自助グループの意義について講演が行われた。

**【講師】 令和6年度交通事故被害者サポート事業検討会委員
武庫川女子大学心理・社会福祉学部社会福祉学科准教授
大岡 由佳氏**

【要旨】

〇はじめに

改めて確認したいことは、自助グループで接している方々は、他人から権利の侵害や損害を受けたことにより、これまでになかった感情がこみ上げてきたり心穏やかにはいられなくなってしまった方たちだということです。

「被害者」とは？

- 「犯罪により害を被った者」 (刑事訴訟法230条)
- 「他人によって権利の侵害や損害を受けた者」

被害者の権利

「知る権利」 「被害から回復する権利」 「刑事司法に参加する権利」 (諸澤, 2016)	「安心して生きる権利」 「自信を持って生きる権利」 「選択の自由の権利」 (森田, 1999)
---	--

被害者学の権威である諸澤英道先生は、被害者の権利には「知る権利」「被害から回復する権利」「刑事司法に参加する権利」があると示されていますが、本日話題となる「自助グループ」はどちらかと言うと、自分には「安心して生きる権利」「自信を持って生きる権利」「選択の自由の権利」があるということを改めて確認できる場が提供される場になればよいのだろうと捉えています。

〇交通事故等被害者サポート事業としての“自助グループ”とは

交通事故等被害者サポート事業で作成された自助グループ支援マニュアル（平成22年度版）によると、「自助グループとは、同じようなつらさを抱えた者同士が、お互いに支え合い、励まし合う中から、問題の解決や克服を図ることを目的に集うグループ」と書かれています。この定義によると、専門用語でいう「サポートグループ」の要素が強いグループが、自助グループということがわかります。つまり、支援センターが行う自助グループは、サポートグループの要素が強いグループになります。

サポートグループは「セルフヘルプグループ」に対するものとして挙げられることが多くあります。セルフヘルプグループとは、機関から独立した当事者等による運営が主体で、同

じ悩みを持つ人たちによって作られた小グループを言います。それに対しサポートグループは、機関による運営で、特定の悩みを持つ人たちを対象に行われる小グループを言います。現在、自助グループを持っている支援センターは全体の半数くらいで、さらにその8、9割くらいはサポートグループと位置づけられることになります。

○セルフヘルプグループとサポートグループの相違点と特徴

両者の違いは、セルフヘルプグループが企画や運営が「当事者」であるのに対し、サポートグループはスタッフが場所を取り案内を出したりします。サポートグループのスタッフに当事者が含まれる場合もありますが、企画の主が誰かで違ってきます。

参考 セルフヘルプグループ と サポートグループの相違点		
	セルフヘルプグループ	サポートグループ
企画	当事者	スタッフ (当事者を含む場合もある)
活動	さまざま	プログラム進行が決まっている
内容	公演、情報交換、体験発表、親睦旅行、会報発行	体験のわかちあい、情報提供、リラクゼーション訓練

活動については、セルフヘルプグループは皆で旅行に行ったり、集まって情報交換をしたり、会報発行や体験発表など多様な活動をすることが多いのですが、サポートグループは場所を固定している場合も多く、プログラムの進行が決まっていて、そこで体験の分かち合いをしたり情報共有をするというのがよく見られるかたちです。

特徴も違います。どちらも非常に重要な位置づけにあるので、どちらが良いとか悪いということではなく、特徴が違ふと考えられています。例えば、サポートグループの特徴としては、参加者が抱えている問題を仲間のサポートや専門

参考 セルフヘルプグループの特徴	
・ 自主性・自発性が最も重視される。 ・ 全員がまったく平等の立場、お互いが支えあうというところに大きな意味がある。 ・ 解決できない問題をどう受容していくかを仲間とともに考える。 ・ 最終的には、自分自身でその問題に取り組んでいかなければならない。 ・ ミーティングでは原則的に「言い放し、聞き放し」	
サポートグループの特徴	
・ 参加者が抱えている問題を仲間のサポートや専門家の助言を受けながら、解決あるいは受容を目指す。 ・ 経験、情報、分かち合い、孤立を防ぐ。 ・ 社会的アイデンティティを維持し、社会的所属の提供ができる ・ 当事者がスタッフに直接ぶつけることの出来ない怒りを、恐れのない形を提供することで発散できる。(Alicja 2003)	

家の助言を受けながら解決や受容を目指したり、経験や情報を分かち合い孤立を防ぐこと等が挙げられます。また、社会的所属の提供ができる、つまり、被害者にとっては属していることが、再び社会で連帯して生きていこうと思えるきっかけになると言われています。海外

の文献などでは、スタッフが入ることで当事者の怒りをきちんと出せる場を提供することができることも、サポートグループの特徴として挙げています。

○サポートグループの運営で、気にすべき3つの側面

サポートグループの運営で、より意識すべきことが3つあります。

まず、グループ全体で共通の課題を明確にできているかということです。

次に、メンバーとファシリテーター、スタッフがどのような関係にあるかということです。

被害の時期も失なったものも個々に事情が違う中で、重要視すべきことは「個別化」です。体調が悪い時には、少しグループから距離を取りながら対応することもあり必要となります。

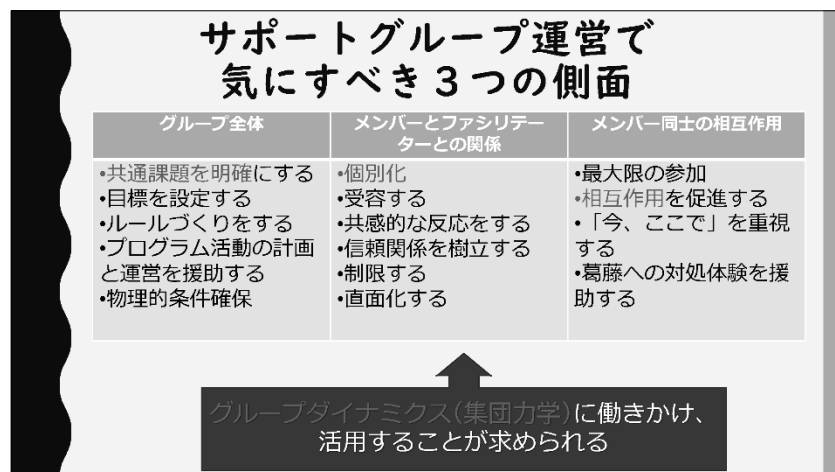
そして、メンバー同士の相互作用をいかに引き出せるかも非常に重要です。スタッフが何かを話すよりも、被害者同士がそれぞれの体験や思いを話すほうが、それぞれが「やっぱり来てよかった」という思いになり、効果があります。この相互作用を促進することが、ファシリテーターが意識して取り組む課題となります。

これは「グループダイナミクス（集団力学）」と言い、学術的にはあるべき姿として知られていますが、単に集まってお茶出してみんなで飲むだけではなく、その背景では、運営側が場割をしながら作っていくという意識が欠かせないということです。

○自助グループで話すことの意味

自助グループ参加者からの声をご紹介します。「安心して気持ちを吐露できる」「精神的な支えになる」「その場だと打ち明けることができる」「心が癒される」「孤立感や孤独感が軽減する感じがある」。被害者だからこそ持ってしまう「なって初めて生じる感情」を、体験していない人には理解されないことから言葉にできないことを、ここだと言えるという声もあります。その他、「二次被害を乗り越える場」「精神症状を理解してもらえる場」「信頼感の再構築をする場」「回復への希望につながる場」という声があります。さらに、他者の役に立つ機会も巡ってくることで自分の存在意義を再確認し、助言をもらった当事者がさらにエンパワメントしていくことにも、自助グループが効果を発揮しているという声もあります。

グループで話すことに意味があるのかというと、意味があるのです。自分の経験をメンバ

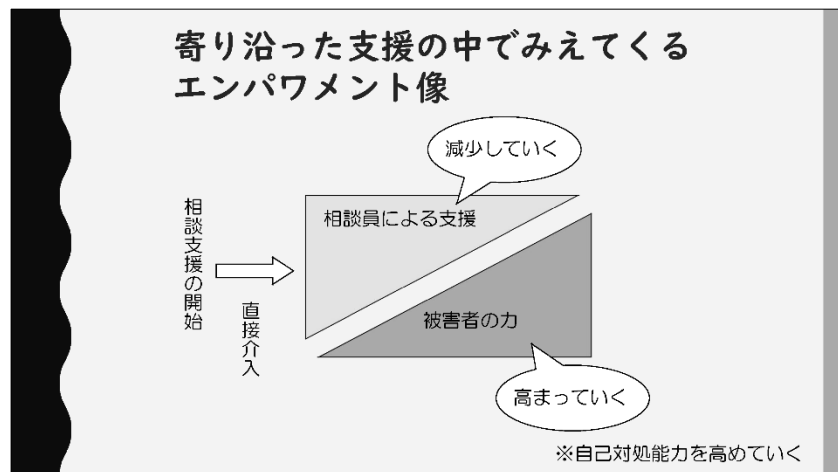


一と共有しづらい状況の中で、グループが発揮する意味は大きく、また、自分一人で悶々と考えるよりも話すことにより、自分の中でできあがってくるストーリーを自分で聴く体験にもなります。つまり、自分を統合していくことであり、感情を吐き出すことが自分の本来持っている感情を取り戻すことにもなるのです。また、自分が話すことが人の役に立つことを実感したときに、自尊心の回復にもつながると言われています。

自助グループが持っている基本的なメッセージは、「あなたは一人ではない」「あなたはあなたのままでいい」「あなたには力がある」ということであり、それを何度も何度も伝え雰囲気を作っていくことが、自助グループの運営において欠かせないことだと思います。

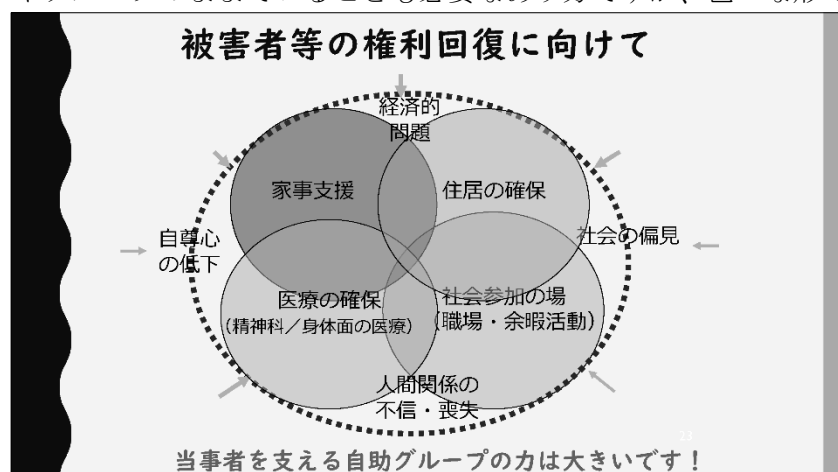
○被害者の権利回復に向けて

グループに入る時期により、うちひしがれた状況で話すことすら躊躇される方もいるかもしれませんし、そこに居合わせることすらしんどいという方もいるかもしれません。サポートに入る相談員は、被害によりディスパワーされた



状態になっている被害者の元々持っていた力が徐々に高まっていくよう意識しながら、一方でスタッフは、被害者の力が取り戻されていくのに合わせて徐々に支援を減らしていく、当事者に委ねていくという意識を持ちながらサポートしていくことが、サポートグループから最終的にはセルフヘルプグループ的な、当事者が当事者のために運営するグループに成長していくこともとても大切な視点のひとつになります。

もちろん、ずっとサポートグループのままでいることも必要なあり方ですが、色々な形で増えていけば、被害者が色々なグループを「自分が選べる」という状況が叶います。自助グループは、1つよりも2つ、2つよりも3つ、3つよりも4つと地域にたくさんあればよく、被害者は自分が一番居心地のよ



い場所あるいは複数に所属することで、少しずつ自分の力を取り戻していくのです。その中で家事も回りだし、住居も保障され、社会にも参加していけるようになれば、被害回復から進んで、権利の回復にもつながっていくのではないかと思います。

この自助グループというものを、ぜひ私たちが改めて考えて、さらに一歩、二歩と進んでいけるとよいと思います。

（２）事例紹介

「ピア・神奈川」の被害者支援

被害者支援の活動を始めたきっかけ、アメリカで学んだ被害者支援や自助グループの必要性、「ピア・神奈川」の成り立ちの経緯や活動について紹介いただいた。

**【発表者】 被害者支援自助グループ「ピア・神奈川」代表
渡邊 治重 氏**

【要旨】

○当時の状況

29年前の3月19日、大学生の長男を突然、交通事故で亡くしました。生活が一変し、遺族になれば分からなかった現実と直面し、深い悲しみと悔しさ、絶望感にもがきながらどうすることもできず、遺された次男の母としても妻としても、何もできず立ち止まり続けていました。私は生きていく力を失い、家族の心もバラバラになってしまった悲しみに打ちのめされ、二重三重の苦しみに襲われました。毎日生きていくだけで精一杯の生活から立ち上がることは不可能に思え、絶望的な日々が長く続きました。

日本の社会は、被害者に対して「あなたにも落ち度があったから被害に遭ったのよ」と扱い、泣くことも許さず、どんなことも我慢して耐えるようにと諭されました。被害者になることは自分に落ち度があるのだと、自責の念にも苦しめられました。それはまるで被害者と加害者が同位置にあるような扱いでした。当時、被害者を支援する流れはなく、親戚や友達でさえ私の心を逆なでする人もいて、理解してもらえない現実と苦しめられました。

私はただ、心に寄り添ってもらい心を許して悲しみを話したかった。聞いてほしかった。子どものことを思い切り話したかった。思い切り泣ける場がほしかったのです。でも、そのような私の思いは通じませんでした。私たち遺族に差し伸べてもらえる支援は、何もありませんでした。

○アメリカの被害者支援に学ぶ

子どもを亡くした年の1月、阪神・淡路大震災が起こりました。新聞には毎日、震災の被害者や遺族のつらい悲しい思いが綴られていました。

私はその方々と同じ悲しみを強く感じました。新聞の手記を手に取り、つらいのは私だけではないのだと泣きながらその方々の手記を毎日ノートに書き写していました。新聞からそこで初めて被害者支援に必要なことや、PTSDやトラウマなどの言葉を知り、関係する本を購入して調べ、各方面の大学に通い被害者支援の講義を受けました。

これからは日本も被害者支援を行う必要があると強く思い、その基盤を学ぶために渡米しました。アメリカでは、全米被害者援助機構（NOVA）や多くの専門場所で研修を受け、アメリカの被害者支援の現実も見学し、被害者支援の基礎から実践、自助グループの必要性を学

び、いろいろな自助グループに参加することもできました。アメリカの国全体に行き渡る犯罪被害者支援の充実した実態を見学し、日本との違いに驚きました。

アメリカでは、多くの被害者支援団体のファンデーションに参加しましたがどの団体も自助グループ活動に重点を置いており、必要性を知らされました。被害者支援において、心の問題が解決しなければその先に進めないと思いました。

○自助グループの一番大切な目的

自助グループ活動については、アリゾナ州のMADD（飲酒運転根絶を目指す母親の会）で学びました。

自助グループを行うにあたり一番大切な目的は、参加者の痛みを取り除くのではなく、各々の痛みを抱えながら立

＜自助グループの一番大切な目的＞
参加者の痛みを取り除くのではなく、各々の痛みを分かち合いながら、立ち向かい乗り越え行動できるように支援

ご自身のこころの葛藤



痛みのわかちあい



希望を見いだす



自身の感情に気づく



自分自身を取り戻す

12

ち向かい、乗り越え行動できるように支援することだと教わりました。参加者がそれぞれの葛藤の中で体験した考えや気持ちをオープンに語り、分かち合うことができるように支援することでした。

また、新たに参加した被害者や遺族は、同じ痛みを体験し癒している被害者や遺族と出会うことにより痛みを分かち合い、年数が経つことにより被害体験は回復する希望を見いだす効果を持つことができることを学びます。そして参加者は、自助グループの落ち着いた雰囲気の中で現在直面する難題への対処法を学びながら、自分が学んだことを被害者や遺族に伝えることで、自尊心を回復することができるようになります。この行為自体が、自分のための喪の仕事にもなるのです。

○自助グループにおける大切なポイント

参加者の癒しのプロセスに、はじめから予定を立てたり、何時間経てば回復できるなど時間で測る予定表はありません。それは、癒しに必要な時間は、人それぞれ異なるからです。

参加者は、発言者に対して第三者的な見解の評価をする「裁く人」になってはいけません。それは、被害に遭った人の悲観な発言はその人だけが感じる痛さだからです。被害に遭った人には個々の癒しのプロセスの時間があるので、その時間表は個々の考え方、行き方、背景、周りの支援の仕方などにより変わってきます。

さらに大切なポイントは、ファシリテーターです。ファシリテーターの重要性を認識する

ことはとても大切な要素です。ファシリテーターに望まれる資質は、PTSD やトラウマの専門家であったり、被害から3年以上が経つ経験豊かな落ち着いた被害者や遺族が適任です。年齢や性別は問いません。そして、参加者の発言や気

自助グループで大切なポイント

- ・時間
- ・場所
- ・ファシリテーター

<ファシリテーターの資質>

- ①年齢・性別は問わない
- ②参加者の発言を素直に受け止め同情をもち直観力
- ③優れた指導力・傾聴力
- ④心の優しさ、温かさ、まごころ

13

持ちを素直に同情を持って受け止め、直観力に長けている人です。さらに、優れた指導力が必要です。参加者の気持ちをまとめ、言葉がスムーズに出ない方を導きながら傾聴できる人です。そして、心の優しさ、温かさ、まごころを感じられることが必要です。

これらを MADD で学び、この研修を日本で活かすようにと何度も言われました。私はこのことを常に心に刻み、自助グループ活動を行ってきました。

○日本での活動の経緯

アメリカに行く前は、日本の大学で学んだことを土台にして自宅を開放し、遺族と何度も会い、ともに涙を流し続けました。その時は、「自助グループ」についてもよく分からず活動していました。自宅で何人もの遺族と会い、同じ涙を流すだけでも、孤独感から立ち直り自分を取り戻していく感じがしたのです。

アメリカより帰国後、本格的に自助グループ活動を始めました。平成 15（2003）年、自宅ではなく公の施設であるかながわ県民センターの 1 室を借り、本格的な自助グループ活動を始めました。当時の神奈川県は、まだ被害者支援の知識が行き渡っておらず、ましてや自助グループ活動については理解されず、随分つらい思いもして心が挫けましたが、苦しみとまどう被害者遺族が本当に何人もおられたので、そういう方たちと同じ涙を流し悲しみに寄り添う活動をスタートさせました。

ファシリテーターとして活動するためには、参加者を知る必要があるため、まず、参加する方々と個別に面談をしました。そして、その方の持っている悲しみの度合いや重さを自分の心に取り入れながら会を運営しました。

日本とアメリカの自助グループ活動の違いを感じることは何度もありました。国民性の違いもあると感じました。例えば、日本の喪の花は白い花だけですが、アメリカでは赤やピンクなど明るい花もたくさん使っているところからも違いを感じました。日本の遺族は、自分の悲観や気持ちを素直に話せる方と話しながらない方、話せないからと参加を拒む方、他者の悲観の思いを受け入れられない方、独占欲が強くて自分が一番悲しいという方など様々で

した。自助グループは、殺人や交通事故などそれぞれ同じ事件に遭った方々で区切るとスムーズに話し合いが行われました。

また、飲み物と軽いスナックは必ず用意しました。涙を流される方が多いので、ティッシュペーパーも忘れず用意しました。涙を流される方にティッシュペーパーを手渡すのではなく、「自分で手を伸ばして取る」ことが最初の自立の小さな一步の支援につながっていると学びました。最初は恐る恐る参加してた参加者も、同じ悲しみの者同士としての連携を感じるようになると、本当にスムーズに自助グループが活動できるようになりました。

現在は全国的に被害者支援の声が高まり、警察を主導にした活動が広められています。国の犯罪被害者基本法設立から5年後の平成21(2009)年には、全国で最初の「神奈川県犯罪被害支援条例」が制定されました。私は自分が住む茅ヶ崎市の市長と直談判して、市役所内に部屋と電話番号を借り、被害者支援自助グループ「ピア・神奈川」の活動を開始しました。そして、平成27(2015)年には「茅ヶ崎市犯罪被害者支援条例」が制定され、県内で最初の精神的な支援を含めた被害者支援活動が本格的に行われ始めました。

○「ピア・神奈川」の活動

「ピア・神奈川」は、当初、かながわ県民センターのみの活動でしたが、24時間携帯電話で無料電話相談も行っていました。電話予約の方や突然訪れる方など、多くの方がいらっしゃいました。無料の電話相談は1日2、3件で、ピアが

「ピア・神奈川」の活動

* 24時間の無料電話相談

1日2、3件

日の落ちる夕方の少し暗くなる たそがれ時
夜9時過ぎの電話

夕暮れに包まれ、家に明かりが灯り始めるころ

自然となみだがでてくる時間と一致

15

どのような活動をしているのかを知りたい方や、何度も面談をされている方がかけてこられました。性犯罪の方からのことも考え、常に女性が受け持っていました。

電話相談がかかってくる時間帯は決まって日の落ちる夕方、少し暗くなる時間、ちょうど食事の支度をするような時間です。また、夜9時過ぎにかかることも多くありました。私自身も日が暮れて家に明かりが灯り始める頃になると、心が塞いで悲しくなり、自然に涙が出てくることが多くあったので、皆さんから電話がかかってくる時間も納得できました。悲しくなる時間帯があるということを、私は知りました。

交通事故の面談は遺族の方がほとんどでした。女性が男性を上回りました。最初は断片的な話で顔色も悪く、話の途中で言葉を詰まらせ下を向き、涙を流される方がほとんどですが、2、3時間思いの丈を話されると、少し我を取り戻されるように見受けられました。また、

心がまとまらず自助グループには参加できない精神状態の方には、何度も面談を持ち、3回目くらいの個人面談からは悩んでいる事柄が言葉できちんと話せるようになり、知りたい情報なども求められるので、こちらからも情報を開示することができました。

***対面の面談**

- ・最初は2～3時間、思いのたけをお話することから始まる
- ・情報提供
- ・女性からの相談が多い

顔色悪く・断片的



思いのたけを2.3時間 話す



少し 我を取り戻す



3回目くらいの面談から、ご自身の言葉で話せるように

16

交通事故はどなたが犠牲になられるかで家族関係が大きく崩れます。「ピア・神奈川」の場合は子どもを亡くした親や被害者遺族の親戚が相談に来られることが多くありました。親戚の場合は、遺族へどのような言葉をかけたらいいいのかなど、その後の対応を主に話しました。子どもを亡くした親の場合は、夫婦のどちらかがダウンしたり、父親がお酒に溺れ会社や仕事に行けなくなるといった悩みも多くありました。

また、遺された兄弟・姉妹にも問題が起こります。両親が亡くなった子どものことばかり悲しんだり泣いたりするため、「私はどうなるの」「私が死ねばよかったの」と母親を責めたり、自分にも目を向けてほしくて非行に走ったり、リストカットをしたりと様々な悩みを抱えていて、私も胸を塞ぎました。また、精神科医にもかかる方もたくさんいて、山のような薬をお持ちになる方もいらっしゃいましたが、「あなたは病気ではないのだから」と話をしました。

事故後の裁判では、被害者は皆、何から始めたらいのか不安で悩み、戸惑っていました。刑事裁判と民事裁判の違いや弁護士の決め方等。そんな時はまず事前に裁判所へ行き場所を確認することや、現在行われている裁判を傍聴・見学

***自助グループ活動**

初めての体験での戸惑い(刑事・民事裁判)
付き添いと裁判傍聴



弁護士とご遺族とのかけはし



意見陳述書・上申書の作成のお手伝い



必要であれば 弁護士の紹介も

***広報活動 (講演活動 ほか)**

17

することで心が落ち着きスムーズに進むなど、誰からも話さないような話もしました。

「ピア・神奈川」は、弁護士と遺族の間の違和感を取り除き、スムーズな心の通う裁判であってほしいと願っています。ですから、弁護士の話す専門用語の意味を分かりやすく説明

もしました。

近年では刑事裁判の参加制度ができ、遺族から意見陳述書が提出できるようになりましたので、その書き方や内容の添削をしています。また、民事裁判での上申書の書き方も分かりやすく指導しました。これは大変お役に立てていたようでした。このことは、私たちが裁判を体験したサバイバーだからできる支援でした。

裁判に関わる弁護士についても、裁判所に何度も出向き傍聴し、被害者支援に長けた弁護士を見つけました。担当していただいた裁判が終わるたびに、その日はどんなことが行われたか弁護士からの説明を求め、解説していただきました。裁判とともに心のケアも続けながらともに歩む感じでした。裁判が終わり、心が落ち着き、お礼の手紙をいただくことがあります。その時は、ピアの活動が役に立てたと安堵し、こちらも感謝の気持ちでいっぱいでした。

○被害者支援を行うに当たり、私の大切にしている信念

被害者支援は、援助ではなく「支援」です。支援とは支えることです。寄り添う姿勢と傾聴を旨とします。倒れている方を無理に抱き起こし立たせてあげることではないと考えています。あくまでも、その方が本来持っている生きる力に気づかせ、その方に寄り添い、見守ることだと考えています。私は、活動の経験により、被害者であっても人間は本来苦しみやつらさを克服できる潜在的な力が備わっていると信じています。

ピアに面談に来られる方は、その日のために自分でいろいろ計画し、考えて、決められた時間に来られます。今日は何時に起きて、何行きのバスに乗って、電車に乗って、あそこに行き、何時までに行かなければいけないといった計画を、少しずつ立てることができるようになります。このことは紛れもなく、自分で計画して行動を取ることであり、自分の力で立ち上がるための自立の第一歩なのです。これが支援の第一歩になると思い、「支援」という言葉を常に思いながら、弱者の立場からの姿勢で活動をしています。

「生命のメッセージ展これまでとこれから」

生命のメッセージ展を立ち上げたきっかけや、活動内容とそこに込める思いについて紹介いただいた。

**【発表者】 特定非営利活動法人いのちのミュージアム代表理事
鈴木 共子 氏**

【要旨】

○生命のメッセージ展を立ち上げたきっかけ

生命のメッセージ展は、私の 19 歳の一人息子とその友人が飲酒運転の暴走車に命を奪われた交通事故がきっかけでスタートしました。息子も友人も希望の大学に合格し、入学式を終えた直後の交通事故でした。彼らは、大学の授業を何ひとつ受けることができませんでした。

加害者は現行犯逮捕され、すぐに裁判が始まり、刑もすぐに確定しましたが、その裁かれた刑があまりにも軽かったことに驚愕し、怒りを感じました。当時は、飲酒運転だけでなく交通事故の刑罰は非常に軽いものでした。何しろ、交通「事故」という言葉が物事を曖昧にしているように思えてなりません。

そうした悔しい思いをしている遺族たちと、悪質なドライバーに対する厳罰化を求める署名活動を展開しました。結果的には 37 万人の署名を集め、国に提出しました。これは、「危険運転致死傷罪」という新しい法律の成立につながりました。私たちの署名活動は、「法律を作る」ことに、法律の専門家だけでなく、私たち一般市民も参加できることを証明したと思っています。

○生命のメッセージ展で生き続ける

息子を失うことで受けた悲しみ、味わった苦しみは、本当に言葉にならないものです。この経験と同時に、交通事故の実態や法律の甘さなど、交通事故死の周辺に存在する問題をも知ることになります。私は、悲しみ苦しみとともに、経験しなければ分からないことを伝えなくてはならないのでは、その場限りの話題で終わらせてはならない、風化させてはならないと強く思いました。被害者のこと、遺された遺族のことを知ってほしい、伝えたいと強く思いました。それと同時に、息子を飲酒運転の犠牲になった気の毒な青年というだけでなく、生かし続けたいと思いました。母の思いと言うんでしょうか。

私は、現代美術というアート製作をしていました。そのため、息子をアートの力で生き続けさせたいと強く願いました。

はじめは、息子の遺品を石膏で型取った作品を作り個展を開く予定でしたが、大切な人を理不尽な状況で殺された遺族たちに出会う中で、自分の作品展ではなく、遺族自身が参加するアートをやりたいと思いました。こうして生まれたのが、「生命のメッセージ展」です。

遺族の手で誕生させた等身大人型パネルになった犠牲者たちを、私たちは「メッセンジャー」と呼んでいます。その胸元には亡くなられた方の写真と、どのような事件事故で亡くなったか、遺族の思い、その人となりを綴ったボードがつけられています。そして足元には、その方の生きた証である「靴」を置き、こうした事件事故は決して他人事ではないこと、命はかけがえのないものだということを伝えています。

○生命のメッセージ展の活動

生命のメッセージ展は、平成 13（2001）年にスタートしました。最初は、東京都の地下コンコースで、被害者支援都民センターの催しの一角に展示しました。私は都民センターの早期支援を受け、自助グループにも参加していました。その時の自助グループのメンバーは 16 人で、16 人のメッセンジャーでスタートしました。

また、署名活動で知り合った遺族にもメッセージ展への参加を呼びかけました。しかし多くの方が、「家族を晒し者にするのは忍びない」「亡くなった家族を思うと何も手につかない」と否定的でした。今までこうした試みはなかったので、戸惑う遺族が多かったのは当然のことだと思います。しかし、「命の重さを再認識してほしい」という生命のメッセージ展のコンセプトが少しずつ理解と賛同を得て、参加する遺族が増えていきました。初めての開催から 4 か月後に開催した第 2 回では、45 家族 48 名のメッセンジャーの参加となりました。今では、141 家族 148 名のメッセンジャーです。

メッセンジャー 148 名全員が展示される生命のメッセージ展を「本開催」と呼んでいます。本開催は年に数回だけの開催ですが、今年 5 月に議員会館で開催しました。元総理はじめ多くの議員や官僚の方々に見学していただきました。その他、道徳や人権教育、交通安全啓発、更生教育などの目的に合わせた小規模のミニメッセージ展があります。現在、敦賀市にある「人道の港敦賀ムゼウム」で企画展を開催しています。ここは、第二次世界大戦中に「命のビザ」を発行し、たくさんのユダヤ人を救った杉原千畝氏の功績を称えたミュージアムです。こうして、全国の学校、企業、全市町村の会場で、多くの方にメッセンジャーたちに出会っていただいています。事件事故は決して他人ごとではないということ、命は奪っても奪われてもならないということを伝えています。命の大切さの気づきの機会になっていると、私たちは確信しています。

私たちはこの活動を、「種まき活動」と言っています。メッセンジャーたちとともに、日本全国に命の種を蒔いています。その種が芽を出し、葉を茂らせ、花を咲かせ、やがて実を結ぶと思っています。すぐに結果が出ることはありません。でも、いつかその実を未来の人が収穫してくれるのではないかと夢見ています。祈りの活動と言ってもいいかもしれません。私たちはこれからも、このメッセージ展が続く限り、命の種を全国に蒔き続けようと思っています。

生命のメッセージ展は、被害者支援につながると思っています。殺された大切な人をメッ

センジャーとして生かし続け、「物語をみんなで紡いでる」のだと思っています。例えば、大人への第一歩を踏み出そうとした時に事故に遭った私の息子と同じ年代の娘、息子を失った親たちは、生命のメッセージ展に「娘、息子を就職させる」という物語を紡ぎます。就職して全国に出張し、たくさんの人に出会い、命の大切さを伝える仕事をしているという物語です。少なくとも生命のメッセージ展においては、彼らは過去形存在ではなく現在進行形存在なのです。私たちの活動の主人公は、私たち遺族よりも亡くなられた方、メッセンジャーたちです。会場に訪れる遺族の中には、初めて心から泣ける場、心から笑える場だと言ってくれる方もいらっしゃいます。これは間違いなく、遺族にとって慰めにつながるものだと思います。

○「生命のメッセージ展」に込める思い

「いのち」は様々な書き方があります。ひらがなで「いのち」、漢字一文字で「命」、でも私たちは、わざわざ「生命」と書いて「いのち」と読ませることにこだわりました。

そこに込める思いのひとつは、「命が生まれる」。犠牲になった人たちはメッセンジャーとして、新たな命として生まれているのです。それから、「命を生かす」。一人ひとりが理不尽な死です。その死を無駄にしないという私たちの決意です。そして、「命を生きる」。遺された私たちは犠牲になった人の分まで精一杯生きようという、誓いの言葉、私たちの決意です。

その私たちの気持ちを、詩でも伝えていきます。

いなくなってもいなくなる
その姿を見ることも
その体に触れることも
その声を聞くことも
できなくなってしまった大切な人たち
心の中でともがあると慰めにするが
揺れてしまうその思い
いなくなってしまった大切な人たち
会いたい 抱きしめたい
その時おぼろげに見えた涙の向こうに人型パネル
いなくなってもいなくなる
そんな声が聞こえた
大切な人が新たな命を生きるかたちなのか
たかが人型パネル
されど人型パネル
一度止まってしまった彼らの時間が

今、再び動き出す
本当の存在はいなくなってもいなくなるらない
大切な人たちはここにいる

○これから

生命のメッセージ展は、平成 21（2009）年に「いのちのミュージアム」として法人化し、平成 22（2010）年に東京都日野市の廃校になった小学校を借りて、常設展示並びに事務所を構えることができました。しかし、校舎の老朽化に伴い、令和 4（2022）年に閉館しました。

そして今年 4 月、福井県敦賀市にある廃校を借りることができ、「いのちのミュージアム福井 Base」として開所しました。地元の人たちの協力を得て展覧会を開催し、新たな一步を踏み出したところです。

ここの地名は、「愛発」と書いて「あらち」と読みます。「愛を持って旅立つ」という意味合いがあるので、本当に生きたくても生きることのできなかつた人たちから後押しされて、今私たちは、本当に大きな一步、新たな一步を踏み出そうとしているのだと思います。

（３）質疑応答

被害者団体からの事例紹介及び参加者への事前アンケートからの質問を受け、質疑応答が行われた。

○はじめに

[和氣氏]

- ・私が自助グループを始めたきっかけは、「生命のメッセージ展」で多くの被害者と活動する中で、「これが被害者の背中を押してくれる、大切な自助グループなんだ」と思ったことである。被害者が孤立せずに前を向いて歩くためには、自助グループ活動が必要なのだと伝えていきたい。

[大岡氏]

- ・自助グループ活動を当事者に届けるためには、支援関係機関・団体が知識や知見を共有しながら進める必要がある。

○自助グループに関する情報提供について

[和氣氏]

- ・被害者にどのような自助グループがあるのかを情報提供することも支援のひとつである。
- ・被害者は、自分に合う自助グループを探したり、複数の自助グループに参加して交流を深めることで孤立感を防いだりすることが必要にもかかわらず、どのような自助グループがあるのか支援センターでも把握できていないのが現実である。
- ・被害者は、国の制度や法律について、どこに窓口があるのか分からず、使える制度や法律があるのに使えていない状況にある。一般の家庭でも、事件事故に巻き込まれたときにはどうすればよいのか、事前に家族で話し合えるくらいにまで周知することが必要。国、支援センター、全国支援ネットワークも含めて、広報啓発活動はとても重要である。

[渡邊氏]

- ・神奈川県でも、被害者支援機関・団体はたくさんあるが、横のつながりが無い。「ピア・神奈川」の遺族は、インターネットで探したり、他の遺族会から紹介されて来られる方が多い。まず、事件事故を扱う警察から被害者支援はスタートすると思っているので、自助グループ等を紹介してほしい。アメリカでは、遺族が一番合う支援グループにたどり着けるよう、支援内容等の情報が載ったパンフレットを渡し自助グループ等を紹介している。
- ・本日の会議で、支援センターの出席者から質問が出ないことにすごく不思議さを感じた。活動する上で悩みがあるならば、どんな小さなことでもこの場で打ち明けて、どのような方法にすれば、本当に遺族のために役に立つことができるかという質問があると思ってい

たので、今日はとても残念だった。

[大岡氏]

- ・自助グループは、まだまだ日本では十分に広がっていない。そこへコロナ禍になり、一旦衰退してしまった。日本では、この 20、30 年、サポートグループよりもセルフヘルプグループの活動の方が、ニーズに応じて進められているというのが現状。だからこそ支援センターには、今どのような人がいて、どのようなニーズを必要としているのか、支援者ができることは何なのかを考えてほしい。

[和氣氏]

- ・被害者はどのような自助グループがあるかが分からない。自分にあった自助グループを模索している。複数の自助グループに属してもよい。
- ・自助グループが必要だと自ら言える被害者もいるが、自助グループが必要だと言えない被害者もいるので、「全国ではこういう自助グループがありますよ」と資料を渡すことも必要。
- ・警察庁や支援センターは、全国でどのような自助グループがどのような活動をしているのかの情報をホームページに掲載するなど、たくさんの情報を分かるようなかたちで提供することが必要。そして、支援センターや自助グループの窓口から被害者に情報提供できるよう横のつながりを作っていく必要がある。

[被害者団体]

- ・当会では、事故に遭ったとき、何をどのようにすればよいかを時系列で説明した冊子を全国配布している。被害者支援センターにサンプルを送り、必要であれば何冊でも配布しますと案内したが、3、4 センターから回答をもらっただけで、音沙汰なしのセンターが非常に多い。ぜひ活用いただきたい。

○自助グループの犯罪種別分けについて

[被害者団体]

- ・渡邊氏（ピア・神奈川）の発表にあった、「自助グループを事件によって分けるとスムーズに行われる」の意味合いについて教えてほしい。私が参加している自助グループは、殺人や交通被害を分け隔てなく行っている。犯罪被害の枠を分けると、被害の隔たりを設けてしまうような気がする。

[渡邊氏]

- ・自助グループというのは、誰にも理解してもらえない自分の思いを話せて、共有できるこ

とが大切。分け隔てなくいろいろな人が集まっても話ができ、スムーズに会を運営できるのであれば、当事者が問題なければ、それでよいと思う。

- ・ただ、ファシリテーターがどのような対応をしているのかは気になる。

[和氣氏]

- ・被害者支援都民センターでは、殺人事件の被害者も交通事故の被害者も一緒に参加して開催している。栃木県の被害者支援センターもそれをモデルに自助グループを作り、殺人事件の被害者を含む会と交通事故の被害者だけの会と2つある。犯罪種別が違う被害者でも同じ意見なんだろうかと、最初はお互いに探り合うような様子も見られたが、共感できるところはたくさんあり、前を向いていくためにお互いに意見を共有している。
- ・怪我や後遺症を負った被害者等と遺族とでは、少し違う部分が出てしまうのではないかな。

[大岡氏]

- ・いろいろなかたちがあってもいいので、1人が1つのグループだけではなく、犯罪種別に関わらず自助グループに参加することもあれば、自分の被害の体験をより深く話せるような同じ種別の被害者が集まるグループにも所属することもあっていい。
- ・一方で、今の日本では自助グループの数が少なく、地域によっては選べないのが現状。
- ・それぞれのニーズに合わせて変えていく必要もあるし、これから作っていく場合には、当事者のニーズに合わせてグループを立ち上げていく必要もある。

○「交通事故」という言葉の使用について

[被害者団体]

- ・鈴木氏（いのちのミュージアム）の発表に、「交通事故」という言葉は曖昧さが出ているという発言があった。被害者は、「交通事故」という言葉自体に違和感を感じており、「交通犯罪」「交通被害」という言葉を使い、「交通事故」という言葉は極力使わないようにしている。「交通事故」という言葉を、意識して使わない方向にはならないのか。

[和氣氏]

- ・「交通事故」「交通犯罪」「交通事件」について、「交通事故」とひとまとめにされることには、非常に憤りを感じている。全国被害者ネットワークでは、「交通犯罪」という言葉を使っている。交通事故には物損事故や業務上過失も含まれると思うが、死亡事故や悪質な交通事故はやはり交通「犯罪」とか「事件」という言葉を使い、警察庁はじめ犯罪被害者支援に関わる関係部署の方々には、区別をしていただけるとありがたい。

[牧氏]

- これまで、過失で発生した事故から殺人や故意に近いものまで、ひとまとめにして「交通事故」という言葉が使われてきた。名称の使い分けまでなかなか意識してこなかったという面はある。いろんな場面に応じてどの用語を使うのが適当かについては、これから意識していかなくてはならないと思っている。

[被害者団体]

- 世界的に考えて、「トラフィックアクシデント」という名称を使うのはどうか。少なくとも被害者は、アクシデントなのかそれとも事件なのかを意識的に変えていく必要がある。

[鈴木氏]

- 個人的には、「なんで事故なんだろう」とすごく疑問で悔しかった。「絶対に『交通事故』じゃなくて『交通犯罪』だ」と言いたいが、私たちの活動は「大切な人を亡くした私たち」というところでつながっているのに、それが事件事故の大小だったり、「交通事故」「交通犯罪」というようにアクシデントか事件かと分けてしまうと、「自分のところはアクシデントに近い事故だったんじゃないか」というように、ヒエラルキーができてしまうのではないかという危惧感がある。

[大岡氏]

- 「大切な人を亡くしたというところでつながる」ことを、それぞれの自助グループの意義、目的としてしっかり打ち出されることが重要なポイント。サポートグループであればなおさら、どのようにまとめるかを主催者側が意識して作っていくと、より良い運営にもつながる。

[被害者団体]

- 本事業名について、「事故」という言葉を取り、「交通被害サポート事業」あるいは「道路交通被害者サポート事業」としてはいかがか。被害者が「事故」という言葉に違和感を持っていることを含めて、考えていただきたい。

[大岡氏]

- 被害者からこのような意見もあることを念頭に置きながら、今後の支援に当たっていくことが重要。警察庁にも検討いただきたい。

○交通事故後遺障害者の場合

[被害者団体]

- ・小学生の時に交通事故に遭ったこどもは、それからずっと、重度障害で介護を受けている。事故直後、助かる確率は1%だと言われたときの親の心の痛み、不安は説明できない。命は助かったが、頭部外傷によるてんかん発作、手足など体の変形、リハビリをすると逆に骨折するなど様々な困難がある。そういう困難を経過するうちに民事裁判があり、当時の司法では、罰金 20 万円で終わってしまった。その後、弁護士を何人も替えて民事裁判をし、事故から数年後に最高裁まで行って勝った。弁護士との付き合い方の困難、リハビリの問題、体の変形の問題、社会システムの矛盾などについて、当事者同士で話す機会があるとよい。多くの困難があることを理解してほしい。
- ・遺族と介護が必要な障害を負った被害者との間には、どうしても隔たりがある。
- ・年間 300～400 件くらいの相談を受ける中で、半分は電話、半分は直接会って話をしないと前に進まない。事故から間もない人の相談が多く、遺族は全体の 10%くらい、90%くらいは意識がない方、意識はあるが家族のこともわからない脳損傷がひどい方、重度脊髄損傷で首から下が動かない方である。支援者は、日本の社会保障制度をきちんと導き、解決できる道を示すことができる技量を持ってほしい。

[大岡氏]

- ・どのようにして「自助グループ」という枠組みで支えることができるのかを探っていくことが、次につながる。

[和氣氏]

- ・以前、脳障害の被害者の話を聞き、支援やいろいろな制度整備がまだまだ必要だということに気づかされた。怪我をされた方もそれぞれに大変な思いをして生活しているので、支援センターは、被害者が生きていくために必要な支援に結びつけることができるよう、日々いろいろな被害者の意見を聞きながら質の向上をしてほしい。

[大岡氏]

- ・事件が起こってから間もないときは、グループというよりも、今直面している課題を個々でやり取りしていくことが優先されることもある。そのようなときは、個別対応で、今抱えている課題の一つひとつ一緒に解決していくことが大切である。受容や傾聴だけでは話が進まない時期があるので、個別対応が落ち着き、他の被害者の話も聞けるようになった状態で自助グループにつないでいくというように、段階的なつなぎ方も意識をする必要がある。そこも自助グループの運営ではポイントになる。

○「物損事故」は被害者支援の対象になるか

[牧氏]

- ・基本的には、「交通事故」に物損事故は含まないが、相談事業についても物損事故を排除しているわけではない。本事業においても、あえて物損事故を除いているという意識はないので、必要があれば物損事故も対象になってくると考える。

[和氣氏]

- ・犯罪被害者等施策推進会議の一員として、交通事故の被害者としての「粹」があるかを確認したところ、物損事故でどちらかの被害者も犯罪被害者であると回答をもらったので、物損事故も被害者支援の対象としてほしい。

[大岡氏]

- ・「被害者」について、どこまでが被害者なのかはよく議論になる。これは、都道府県、市町村により、財産的被害も含めるか、そこにサポートを入れるかなど、様々に議論されている。支援者がそこに関わっていく、現場で見えていることを伝えていく、より支援が必要な方に支援を届けられるようにしていくことが、ますます重要になってくる。

○総括

[和氣氏]

- ・交通事故と言っても、死亡事故もあり、後遺症の被害者もあり、物損事故の被害者も犯罪被害者として支援を受けることができる立場である。それぞれが大変な思いをしているので、国を上げて支援に取り組んでいかなければならない。
- ・自助グループに参加したいという被害者もいれば、情報がないので動けないという被害者もいるので、被害者への情報提供はとても重要。そのための取組を行う必要がある。

[大岡氏]

- ・都道府県に犯罪被害者のコーディネーターを配置することが決まった。これを進めるに当たり、被害者支援センターに対して、ニーズや県への要望についてのヒアリングがあった際は、自助グループの情報をもっと当事者に共有できる仕組みを作ってほしいと伝えてほしい。
- ・もっと広報が充実していくことが、非常に重要である。

7. まとめと今後の方向性

(1) まとめ

①開催について

今年度は、47 都道府県に所在する被害者支援センター、被害者団体及びナスバ（独立行政法人自動車事故対策機構）を対象として、有識者による講演及び交通事故被害者等団体による自助グループ活動の紹介をオンライン配信で開催した。

有識者による自助グループの意義についての講演の後、交通事故被害者等団体による事例紹介では、被害者支援自助グループ「ピア・神奈川」と特定非営利活動法人いのちのミュージアムより、被害者支援の活動を始めたきっかけや活動の経緯と内容、そこに込める想いについて紹介がなされた。

質疑応答等を通じて、情報提供も支援のひとつであり、多くの全国の被害者がつながるためには自助グループの情報を様々な方法で広く提供することが必要であり、そのための仕組みづくりや広報の充実が重要であることを共有した。

②参加者について

参加を希望した被害者支援センター、被害者団体及びナスバの方が参加した。

③参加者アンケート結果について（一部抜粋）

参加者からは、

ア 講演「自助グループの意義とは」

- ・交通事故被害者サポート事業の位置付けや目的について深く考えることができた。
- ・「自助グループの持つ力」についてとても丁寧に説明があり、分かりやすかった。
- ・自助グループを運営していく上で大切な事項を改めて確認できた。
- ・支援者としての心構えについて認識を深めることができた。
- ・被害者の回復する力を高めるためのサポートの大切さに気付くことができた。
- ・被害者の回復に自助グループの存在が大きいことが分かった。
- ・自助グループという言葉は知っていたが、その意義について詳しく話を聞くことができてよかった。
- ・自助グループの意義について改めて確認ができた。
- ・自助グループは被害者が自分の権利を確認する場であるということを理解できた。
- ・自助グループで話をすることで感情を取り戻し、自分の経験が他の人の役に立つという実感を持つことが自尊心の回復へつながると聞き、大切なことだと思った。
- ・自助グループはたくさんあればあるほどよいということに共感できた。自助グループの果たす役割は非常に大きいと理解できた。
- ・サポートグループにはセルフヘルプグループに発展させる役割もあるという大切な

意味がよく理解できた。

- ・セルフヘルプグループとサポートグループの特徴や相違点、位置付け等について、分かりやすい説明でよく理解できた。
- ・自助グループの7、8割がサポートグループであり、センターのスタッフの役割が大きいことを改めて感じた。
- ・サポートグループの運営で気にしなければならないこととして、グループダイナミクスに働きかけ活用することが求められるとの説明を受け、一人でも多くの方に参加してもらええるためのヒントを得ることができた。
- ・セルフヘルプグループは、スタッフ（コーディネーター）がいなかったため「言い放し・聞き放し」になってしまい、解散してしまった。サポートグループとして、経験や情報の分かち合いができ、孤立を防ぎリラクゼーションできる、参加してよかったと思ってもらえる自助グループを目指したい。
- ・寄り添った支援の中で見えてくるエンパワメント像は、とても参考になった。当センターでは、自助グループはできるだけ参加者中心に運営し、センターは場所の提供や案内など補助的なことに徹するべきだという意見に沿って開催しているが、センター側から多少支援したり関与するほうが、活動がよりスムーズにいくと思うときがあり、その場合にどの程度関わるべきか悩みがあったが、参考になった。
- ・「あなたは一人ではない」「あなたはあなたのままでいい」「あなたには力がある」というメッセージは、どのような環境でも人を勇気づけ元気にすると思う。これらのメッセージを参加者に伝えるために、どのように自助グループを運営していけばいいのか、もう少し具体的に聞きたかった。
- ・自助グループがない当県としては、被害者の声が参考になった。
- ・「心の葛藤⇒痛みの分かち合い⇒希望を見出す⇒自分の感情を気付く⇒自分自身を取り戻すプロセスの背景は個々で変わってくる」という部分が心に残った。サポートする側から「その痛み、分かりますよ」と言えるものではなく、計り知れない痛みは分からないので、「分かろうと寄り添うことはできます」という姿勢が被害者家族に対して安心を与え、心許せる場をつくるということを、いつも考えて自助グループを運営していく必要があると思った。

イ 事例紹介『ピア・神奈川』の被害者支援

- ・渡邊氏の力強いエネルギーを感じた。当事者の体験談や思いを聞くことができてよかった。
- ・自助についての見識と情熱に圧倒された。
- ・大学生の長男を亡くしてから、自助グループの必然性を感じ取ってこられたその行動に、尊敬の念を感じた。

- ・自助グループの立ち上げから現在に至るまでの経緯と活動状況を分かりやすく説明され、非常に参考になった。
- ・ファシリテーターとしての役割の基礎や基本を学ぶことができた。
- ・渡邊氏が日本の被害者支援の進化のために尽力してきたことがよく分かった。自助グループとしての活動内容は、支援センターそのものだった。
- ・息子を亡くした後、「思いきり話したかった」「思いきり泣きたかった」との話は、自助グループの原点だと感じた。
- ・自助グループで行う面談のノウハウは大変有益であった。
- ・被害者の癒やしに必要な時間とプロセスは様々で、支援は相手を知った上で活動することが大切だと分かった。
- ・アメリカの被害者支援の実態の報告を聞き、日本は法的な制度ではまだまだ整備が必要と感じた。
- ・グローバルな視野での被害者支援の活動が大変参考になった。
- ・渡邊氏の活動が、全国の支援センターの道しるべになっていると思う。「ティッシュ1枚でも自分で取れるようにすることだけでも意味がある、差し伸べるのではなく」と聞き、初めて自助の意味を理解できた気がした。
- ・24時間電話相談を行い、被害者や遺族が一番助けを必要とするときに対応できる体制をとっていることが素晴らしいと思う。
- ・活動の信念を聞き、自助グループの運営の大切さを実感した。
- ・「大切なのは援助ではなく支援である。そのためには被害者が自分で計画をして実行する。それが自立の一步である」という言葉を肝に銘じる。
- ・自助は被害者にとって必要な大切な場所ということを改めて認識できた。今回学んだことを実践したい。
- ・「その人が持っている生きる力に気付かせながら、寄り添い、見守る」ことを、いつも心に留めて接していきたい。

ウ 事例紹介「生命のメッセージ展これまでとこれから」

- ・詳しい経緯や現在の活動内容、活動のコンセプトを聞き、理解が深まった。
- ・これまでの歴史や思いを聞き、継続の大切さを実感した。
- ・活動の原点と今後の展望を知ることができた。
- ・鈴木氏の力には敬服する。生命の大切さについて、出来事を風化させないという思いが伝わった。
- ・「亡くなった人達は『メッセンジャー』として新たな生命をもらい動き出している。いなくなってもいなくなるらない。遺された者には『生きよう』とする力になる」と聞き、これが「生命のミュージアム」を法人化する原動力になったのだと痛感した。

- ・「生命の種まき活動」という言葉が印象に残った。
- ・私達も法律を作ることに参加できるのだと感じたという話に、力をもらった。
- ・直接話を聞き、生命のメッセージ展が大切にしていること、目指していることを知ることができてよかった。これからは、「生命」に込めた思いを意識して、生命のメッセージ展に関わっていきたい。
- ・「生命のメッセージ展」に込められた気持ちを知ることができた。そして、この活動も自助グループのひとつの形であると認識した。
- ・直接的な被害者支援ではないが、被害者遺族の想いを発信したり、参加家族同士で交流を深めたり、全てが被害者支援につながるという話が心に残った。
- ・生命のメッセージ展にメッセンジャーとして就職し、全国に出張しているという物語を知ると、これからメッセンジャーと会った際は、「事故で亡くなった方」ではなく「事故を防ぐ活動をしている方」という見方をすると思う。全国で活躍して、1件でも事故が減ることにつながればいいと思った。これからも、いろいろなところで命の種をまいていってほしい。
- ・「生命」を「いのち」と呼ぶその心情に共感を覚えた。

エ 質疑応答について

- ・白熱のある討論で、和氣委員と大岡委員の強い熱い思いが伝わってきた。
- ・本当に支援が必要な人に必要な情報を提供することが大切だと分かった。
- ・自助グループについて、支援者はどう関わっていくべきか考えさせられた。
- ・他の自助グループで工夫していること等を具体的に聞きたかった。
- ・自助グループの活動促進に資するような質疑応答が活発にできればよかった。
- ・自助グループを罪種で分けることについて、自分たちなりの進め方でよいということが確認できたのでよかった。
- ・罪種により自助グループを分けるかという議論で、「大切な人を亡くした私たち」という点でつながっているという言葉が印象に残った。
- ・自助グループはいくつ所属してもよいと知り、なるほどと思った。
- ・「交通事故」の表現について、被害者や遺族の想いをこれまでよく分かっていなかった自分を反省した。
- ・交通事故の表現を「交通犯罪」「交通事件」とすることについての様々な意見を聞き遺族それぞれ考え方があることを知り、支援の難しさを感じた。
- ・「交通事故」という言葉に違和感があると聞き、日頃考えなく使っていることに気付かされた。これからは意識して使っていこうと思う。
- ・「交通事故」を「交通事件」「交通犯罪」と表記する提案に同感であるが、一方で過失割合の低い被害者等も対象とするには変えない方がよいとの意見もあり、考えさ

せられた。

- ・交通事故後遺障害者家族からの話が印象に残った。知らなかったことを知ることができた。
- ・交通事故後遺障害者家族の苦悩や問題点を知ることができてよかった。
- ・交通事故後遺障害者家族の思いを話すことができる場の必要性など問題提起があり、考えが及んでいない自分に気付かされた。
- ・今後、後遺障害者家族の話を聞く機会があれば、積極的に参加し勉強したい。
- ・本会議が、「亡くなった方ばかりの話で、重度障害者となったこどもの親の立場は出る幕がない」との言葉に、身につまされるような気持ちになった。視野に入れておかなければと思った。
- ・被害者の中には、重度後遺障害にずっと苦しんでいる人がいるということも忘れてはならない。いろいろな立場の人がいるが、その人たちが参加しやすい自助グループが身近にあることが望ましいと思った。
- ・ナスバをはじめ、いろいろな制度を活用して被害者の支援を行うことの重要性を認識した。
- ・国や行政の支援制度を知らないため、利用に至らない人をつなげることの大切さを学ぶことができた。
- ・被害者遺族が苦労や社会システムの矛盾を語る場が必要との話は、とても参考になった。
- ・社会資源やメンタルについて知識を広げていないと、支える側として自信を持って支援できない。今回、支援センターからの意見等発言が少ないという厳しい意見があった。もっと学び、自信を持って支援にあたっていけるようにしたい。
- ・質疑応答は挙手ではなく、進行役から指名をすれば意見が言いやすくなるのでは。
- ・リモートでの質疑応答は慣れていないので難しいものがあつた。
- ・支援センターからの質問が少ないという指摘に申し訳なく思った。自助との関わりがまだ浅く問題意識が不十分で、手を挙げて質問することは難しいと感じた。

オ 総括について

- ・全体的にとっても意義のある会議で、充実していた。大変参考になった。
- ・自助に携わり1年半が経ち、改めて自助の意義や目的を再確認できてよかった。
- ・被害者支援に対するこれからの取組の方向性と課題が分かった。
- ・当事者の話を聞ける機会はあまりないため、参考になった。他の機関やセンターと意見交流ができ、支援員としてまだまだ知らないことが多いことに気付かされた。
- ・和氣委員が示されたとおり、被害者が複数の自助グループに所属し、自分がより心地よい居場所と出会えることができるとよいと感じた。

- ・複数の自助グループに所属してもよいということだったが、地方では難しい。
- ・どれだけの自助グループがあるのか分からない。どのように自助グループの存在を広報するのがよいか、広く知らせてもいいものなのかも含め、ネット社会においては考えると難しいこともある。
- ・自助グループの存在を周知するために、警察庁で状況を調査して公開してほしい。
- ・自助グループの広報を展開していくことが喫緊の課題であることが共感できた。
- ・被害者が自分で情報を得ていくことは難しい。情報が得られるようにすることは、国や関わる機関の課題である。
- ・被害者が最初に関わる警察が何を考えどう動くかは、被害者やその家族に大きく影響する。警察と被害者支援センターは、現在、被害者支援でどのような活動をしていて、今後どのように横のつながりを構築しながら運営していく考えなのかを知りたかった。
- ・全国にあるいろいろな自助グループの情報を共有し、対面でなくてもオンライン会議や SNS も活用して、必要な人が必要な支援につながれるようになればいい。
- ・全国被害者支援ネットワークが「被害者支援センターの 1 日」という DVD を作成しているように、自助グループについての DVD があれば参考にしたい。
- ・他のグループとの意見交換ができる時間がほしかった。

カ 感想・要望・意見等（リモート会議への意見・要望も含め）

- ・講演や事例等はとても参考になり、エネルギーをもらうことができた。
- ・交通事故といっても様々な形の被害者がいるという気付きがあった。
- ・住まいが遠方であるために自助グループに参加できない場合、リモートで開催することはどうなのか、リモート参加が可能であれば、その時の注意点など聞きたい。
- ・現在自助グループを休止しており、スタッフが十分にいないため見直しもできていない。
- ・ボランティアを始めて日が浅く、自助グループについてもあまり知らなかったので大変勉強になった。質疑応答は委員がとても上手に参加者の意見を引き出し、あっという間に感じた。
- ・休憩がなかったのが心配だったが、充実した内容だったのであっという間に時間が過ぎた。
- ・このような会議があるおかげで、自助の在り方を客観的に見ることができ、同じ点や違う点を知り改善してよりよい自助へのヒントがもらえるのでとてもよかった。毎年参加したい。
- ・病気や災害などの自助グループと協力するのもいいと思う。特に地方では、交通事故や犯罪被害に特化した自助グループで、自分に合うところを探すというのは難し

い気がする。

- ・当センターはサポートグループタイプの自助グループを運営しており、罪状は異なるが全員が遺族である。罪状の違いについてメンバーも思うところはあると思うので、ファシリテーターとしては気を遣うが、今のところ「大切な家族を失った」という共通した立場で時間を共有できている。確かに罪状別の自助グループを運営できればその方がよいかもしれない。
- ・自己紹介や自助グループの立場等を紹介してから本題に入った方がよいのでは。
- ・他の自助グループの意見を聞きたかったので、もう少し時間を取り、十分な話し合いができればよかった。
- ・自助グループの立ち上げの経緯や継続のために苦労したことなどを聞きたかった。自助グループに参加している人の意見交換の時間がもう少しあればよかった。
- ・全体会のみだったので、時間不足や意見が出にくい状況だったように思う。
- ・グループ討議があれば、もう少しいろいろな実情や意見・疑問が聞けたのではないかな。
- ・質疑応答では、「成功例」ではないと思っているため自ら手を挙げることはできなかった。司会から当ててもらえればよかった。
- ・意見交換や質問において、対面ではなく、また、慣れていないためもあり、発言のチャンスが見つけにくく難しい。
- ・リモートなので参加できた。ぜひまたリモートでお願いしたい。
- ・リモート会議は参加しやすいというメリットはあるが、他センターと気軽に意見交換するなど、横の交流は難しいと感じた。
- ・リモート参加は時間と経費削減につながるので大変ありがたい。事前アンケートや配布資料がしっかりとしていて問題なく当日参加できた分、自分がもっと事前勉強が必要だったのではないかと反省した。
- ・事前アンケートを3日前くらいに送付してもらいたい。内容を確認してから参加したかった。
- ・事前にテスト配信があり、とても安心して参加できた。

キ 自助グループ活動の促進のため、どのような研修やプログラムがあったら有用か

- ・自助グループの参加者の話を聞きたい。
- ・各県の自助グループの中で工夫していることや実施したらよかったことの事例提供など。
- ・自助グループの先頭に立って運営をしている立場の人ではなく、「こういうきっかけで自助グループに参加した」「こんな点が自助グループに参加して良かった」という、身近に感じる話を聞いてみたい。

- ・失敗例を知りたい、その時の対応などを知っておきたい。
- ・自助グループの問題点や成果事例を意見交換できる時間を設けてほしい。
- ・ハートバンドでは各グループの紹介動画を作っており、他団体の活動が分かり参考になる。イベントではいろいろなワークショップが行われ、それぞれの団体によって違いがあり、活動の多様性など知ることが活性化させる鍵ではないかと思った。
- ・病院や災害などで家族を亡くした人などいろいろな種類の自助グループの様子や事例を紹介してほしい。そういう情報も含めて周知されれば、自分に合った場所を探しやすくなるのではないか。
- ・自助グループの参加者で攻撃的な性格の方については、他の参加者に影響を及ぼしてもいけないので選定してもよいのではと当センターではアドバイスをもらっている。今後、当センターの支援以外の遺族が参加する場合はどのように決めればよいのか、スムーズに活動していくための研修をしてほしい。
- ・社会保障制度の研修が必要であり有用。
- ・毎年実施して、タイムリーな話題を提供してほしい。
- ・自助が盛んな外国の例などを知りたい。日本の風土に合うかどうかは分からないが、ヒントになるかもしれない。
- ・自助グループの入会について、被害者へはいつ、どの様に説明すればよいかの研修等。
- ・自助グループのスタッフは入れ替わるので、今回の大岡委員の講義は有用。
- ・ファシリテーターの資質向上のための講座。
- ・初心者用、中級編、応用編のDVDがあればよい。
- ・現在できるところへは広報活動をしているが、行き詰まりを感じている。広報の仕方や多機関連携について教えてほしい。
- ・広報について積極的に発信している事例を事前に収集して、共有してほしい。
- ・アンケートなども含め、事前準備があったことが充実感につながっていると思う。

ク 会議参加後の自助グループ活動の実施状況または自助グループ立ち上げに関する検討状況について

- ・現在、平日午前中に開催しているが、働いている遺族は参加が難しいため開催日を検討中。どうするのが一番よいのか、本当に難しい。
- ・働いている人が多く例会は日曜開催だが、平日にしか参加できない人のため、同じ関係性の方に声をかけ平日に開くなど、柔軟に工夫しながら開催している。
- ・昨年4月に長らく休止状態だった自助グループ活動を再開した。準備として、他センターの自助グループを見学し具体的にイメージできたことで、何を準備すればよいかを明確にできスムーズにスタートできた。現在、月1回第4日曜日に開催して

おり、参加人数が多い時も少ない時もあるが、少ない時には参加者の話をじっくり傾聴できるので、それはそれで良い時間を過ごせている。

- ・コロナ禍で自助グループは活動休止になり、今年度、世話人に声かけをしたが休止希望で開いていない。課題は、世話人の高齢化、遺族に声かけしてもなかなか集まりにくいこと。
- ・現在、被害者家族1名とつながっており、賛同する犯罪被害者等からの自助グループ立ち上げの要望があれば、立ち上げることにしている。
- ・参加者が少なくても、活動が続けていくことで被害者にとって回復のきっかけの場であったり、遺族が悲しみを思いきり話し泣きたいだけ泣くことのできる大切な場所と思ってもらえるよう、年に数回は語り合える場を作りたい。
- ・再度、自助グループ立ち上げに関し検討しようと思った。
- ・スタッフが十分でなく自助グループの再立ち上げにはまだ時間を要するが、今回の研修内容を参考にしたい。
- ・被害者支援活動に関わっている遺族やいろいろな立場の人を、ひとつの自助グループで参加してもらえるかととても難しく感じる。
- ・センターには、警察からの交通事故被害者の情報提供がほとんどなく、自助グループのメンバーが固定化して増えない状況。情報をもらえるようにするにはどのような連携が必要か。
- ・メンバーが自助グループに行きたいと思えるにはどうしたらよいかを考えたい。
- ・自助グループの必要性を感じてはいるが、どうやって周知するか、初対面同士の人たちに自由に気持ちを語ってもらう雰囲気はどう作っていくのかなど、問題点はたくさんある。ただ、「大切な人を亡くした私たち」というつながりで考えるなら、いろいろなところと協力して、なんらかのグループを作れるかもしれないという気持ちになった。インターネットやSNSなども活用して、直接対面できなくてもつながれる可能性はあると感じた。

等の感想があった。

(2) 今後の方向性

①開催について

今年度もオンライン開催としたが、参加しやすかったなどの参加者から感想があった。今後も、交通事故被害者等を取り巻く様々な環境に対する理解を深めながら、自助グループ活動の促進等に資する効果的なプログラムを検討する。

②参加者について

今年度は、全国の被害者支援センター、被害者団体及びナスバ（独立行政法人自動車

事故対策機構）を対象とした。引き続き、本会議を通じて、自助グループの立ち上げや自助グループ活動の継続と活性化が図られるよう、被害者支援センター等への参加の働き掛けを行う。

